

監修の言葉

臨床医学において、バイタルサイン（生命徴候）は極めて重要な病態把握の緒（いとぐち）である。

バイタルサインのない患者はいない。またそれは、医学の歴史始まって以来、時代を超えて医療者により計測され続けてきた簡単な数値である。

それはまず、病態の急性、慢性を区別する大きな手がかりとなる。

すなわち、バイタルサインが異常な場合の多くは急性疾患であり、患者の自覚症状の訴えがほぼ必発である。一方、慢性疾患のそれらはほぼ正常で、患者は症状の訴えに乏しい。

日本の医学教育のなかでは、しかし、残念なことにとりわけバイタルサインの重要性やその解釈法の教育が欠如している。

その理由として、主に慢性疾患を中心とする本邦の医学教育の在り方そのものに問題があると言わざるを得ない。

最近、厚生労働省により臨床研修制度が義務化され、救急研修が必修化された関係で、急性疾患を取り扱う教育が必須となってきたが、いまだに本邦の臨床教育に定着しているとは言いがたい。

バイタルサインは体温、脈拍、血圧、呼吸数などのわずかな項目の簡単な計測値に過ぎないが、実はこの中に患者の病態そのものが集約されていると言っても過言ではないのである。

体温については微熱、高熱、超高熱や低体温などがあって病態によりさまざまであり、脈拍についても体温上昇とともに規定通りに増加するものがあれば、病態の違いにより比較的頻脈や徐脈をもたらすなど、個々である。

血圧や呼吸数についてもまた、同様である。

この本は実際の症例に則して、バイタルサインの生理学的解釈法が病態の把握にいかに関与するかを例示したものである。

ここに記載されている症例群を理解するうえで、バイタルサインの各数値が生理学的に何を意味し、またどれほどの重要性を持っているかに着目しつつ、それらを参考に臨床診断を進めていくならば、確定診断からはあまり遠くない最終結論に到達することができるかと確信する。

また、各人がその方法論を今後の臨床に役立たせるならば、この本を監修した者としては望外の喜びである。

2011年3月

群星沖繩臨床研修センター センター長
宮城征四郎